

ケイタイは学校に持ち込み禁止だろう。

あ、ここは私の通っている小学校じゃなかった。

「無視かよ。小学生？」と男子が続ける。

無視って、あんたも相変わらずケイタイを見たままなの  
ですけど。

「ケイタイにらんでいる横顔、結構、いけてるよ」と言っ  
てやったら、反応するかと思ったら、やっぱりそのまま。

「声、出せるならだせよな、小学生。六年？ 五年？ 背、  
低いし、チラ見したら怒っている表情も隠せないガキんち  
よだし、ひょっとしたら四年生？ だってえなあ。なにす  
んだよ」

何をしたかというと、膝下にケリを入れてやったのです  
が。これで、やっと、こっちを見ました。まあ、普通顔の  
男子。バカには見えないだけまし程度かな。

「人に声をかけるなら、自分から名乗りなよ。ケイタイお  
たく男子」

そいつは、チツと言って、ケイタイを迷彩色のカーゴの  
ポケットに入れた。入れたって言うより投げ込んだだけ  
ど、その仕草はかなり決まっていた。上着はフードが付い  
ているネイビー色のダッフル。まだ寒いだろうに、前を開  
けて中はTシャツ一枚しか着ていないのを強調してんの。

「ユー。六年生、男子。って、もう卒業式は終わったから  
元六年生かな

「コトノハ、五年生、女子」

「お、下級生。ガキか」

「一個差だけだよ」

「子どもの一年の差は大きいよ、あの人らと違って。し  
っかし、いつもそんなに暴力女子なわけ」

「ってか、ほら、足の方が私の意志を無視して勝手に蹴っ  
てしまう病気。医者によると荒馬病って言うらしいの」

「単なる暴力だろ」

「あやまってもいいけど、ユーがケイタイ見たまんまで、  
相手に話しかけるからだよ」

「あ、それ、癖。チラ見はしてるんだけど、ついキリまで  
やめられない。医者によるとケイタイ依存症ってやつ。相  
手がカノジョだったし。それより、コトノハ、ケイタイは？」

「ウチの学校、ケイタイ持ってきてもいいけど、使うの禁  
止だから」

「なんだそれ？ だいいち、ここはコトノハの小学校では  
ないし、おれの小学校でもないし、そもそももう小学校で  
もない」

おっしゃる通りでございます。私が全部間違っています。  
しぶしぶ私は認めた。

「しっかし、コトノハのそのかっこう、どうでもいいけど、  
子どもブランド雑誌から出てきたみたいで、かなり引くな  
あ、悪い。人の趣味に口に出すのもおれの悪い癖」